
メタフォリカルな変身

田口 一示

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メタフォリカルな変身

【Nコード】

N6910B

【作者名】

田口 一示

【あらすじ】

おばあちゃんが言っていた。子供は鬼から見えない。仏様が隠して下さるんだと。

上(前書き)

メタファー (metaphor) 〓 隠喩

血の色をした鬼が、家の戸口から出てくる。大丈夫、僕は見えやしない。淡い暖色をぼかした水彩の景色の中に、原色よりも濃い血の赤が歩く。眼球が飛び出して僕を探す。大丈夫、僕は見つからない。おばあちゃんが言っていた。子供は鬼から見えない。仏様が隠して下さるんだと。

壁に足をぶつけたことであろうやく目が覚めた。硬い痛みが指に響いた。畳張りの寝室には誰もいない。もしかするとこの家にすら誰もいないのかと思う程、静かだ。開け放した縁側から太陽の光が差し込んでいる。

寝巻き姿のまま居間へ行っても誰もいなかった。畳に自分の素足が擦れる音だけがする。昼間は庭側の窓を全て開け放すので、人がいてもいなくても電気は消したままだ。家の中がセピアに見える。取りあえず、食卓の椅子をひいて座った。

まだ腹はすいてない。
よく頭が覚めてない。

高校の数学の授業中もこんな感じだったなあ、と思った。でも今は授業中と違って、自由に寝ることができる。

机に顔をふせかけた時、玄関が開く音がした。しばらくして足音が廊下を歩いて来る。正面の扉が無遠慮に開いて、スーパールのビニール袋の音とともに和夫さんが入ってきた。深紅のセーターが寝起きの目を刺激する。

「ああ、起きてたの」

「寝ている時間じゃないよ」

「そうか…」

和夫さんは袋から豆腐やらネギやら里芋やらを食卓の上に出し、それを冷蔵庫にしまっている。

和夫さんは僕の母の妹の主人にあたる。もうすぐ定年を迎える歳だった。

「魚は何が好きかな」

和夫さんが聞いた。

「焼魚なら何でも。選べるなら鰯かな。開きが好きなんだ。鰹沢を言わしてもらうなら、塩焼の鮎に目がない。」

一人で喋った感じがした。和夫さんが口にする話題は食材のことが多いので、慣れた口調になっていた。

和夫さんはしばらく黙ったまま作業を続ける。いつも、そうだ。考えて言葉を選ぶ。

「鮎か…。実家の近くの川でよくとっていた。網を張るんだ。」

「うん。知ってる。」

何度か送って貰ったことがあった。というより、鮎を食べた経験はそれがほとんどだった。

「あの川の鮎は上等でな、腹が金色なんだ。売り物の銀色より500円ほど高い。」

「へえ、なんで」

「それは知らん」

なんじゃそりゃ。

和夫さんは腰まで水に使って、川の両岸に網を張る。そして、ひたすら待つ。適当な間隔で網を見てまわり、かかった鮎やそれ以外の物を網からほどく。

和夫さんにピッタリの作業だった。

初夏の空気が蒸せる昼下がり、和夫さんは川岸で鮎を入れるクールボックスに腰掛ける。煙草も持たずに川を眺めている。何時間も。

5

「もう昼飯になるが、何か食うか。味噌汁でも。」
和夫さんが言った。

「ああうん、お願いする」

出来上がる頃には空腹になるだろうと思われる。

和夫さんは先ほどしまった豆腐やらネギやら里芋やらを取り出し始めた。

「和くんは変身しちゃうのよお」

和夫さんの奥さんである亮子おばさんが言っていた。あの頃僕は幼く、亮子おばさんは和夫さんを和くんと呼んでいた。

若い頃の亮子おばさんは大変モテたらしく、ハツラツとした人

だったので、和夫さんはいつも引っぱ張られている感じがした。

「何になっちゃうの？」

僕はそう聞いた。畳の上にいびきをかいている和夫さんで、遊んでいる時だった。

おばあちゃんや、死んだおじいちゃん、僕の両親、繋がりわからない親戚の人達、亮子おばさん、そして和夫さんがこの家に来た。20年ほど前の正月。

広い居間の畳の上に大人数用の長いテーブルが置いてあり、お節料理などのご馳走が並べられていた。両側に敷かれた座布団に皆がすわり、それぞれ勝手に盛り上がっている。母さんとおばあちゃんと亮子おばさんは時々立ち上がり皿を運んだりしていた。オレんじジュースのコップに口をつけた僕以外、みんな赤い顔をして飲んでいた。噛み合っていない会話で機嫌良く笑っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6910b/>

メタフォリカルな変身

2010年10月20日19時50分発行